

(研究主題)

ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業改善(2年次)
～山場を中心とした授業展開～

(スーパーバイザー)

松崎 利美(現 名古屋学芸大学講師 / 前 愛知県西尾市立幡豆中学校校長)

1. はじめに

本校では、昨年度より「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業改善」を研究主題に、ユニバーサルデザイン授業(以下、UD授業)の研究に取り組んでいる。

昨年度(1年次)は、「焦点化・視覚化・共有化」をキーワードとした授業づくりに取り組んだ。また、UD授業研究の第一人者である小貫悟先生(明星大学教授)に本校の研究実践への助言・指導をいただくとともに、UD授業を行う意義・目的、授業づくりの方法等、UD授業の基本理論を学び、理解と認識を深めた。

2年次となる今年度は、小貫先生の理論と、UD授業を先進的に実践し成果を挙げている幡豆中学校(愛知県西尾市)の実践を参考に研究計画を作成し、「山場を中心とした授業展開」を重点(副題)に研究を行うこととした。そして、研究を進めるにあたり、幡豆中学校の実践を先導されてきた松崎利美幡豆中学校前校長先生(現 名古屋学芸大学講師)をスーパーバイザーとして迎え、本校の研究に対する指導・助言をいただくこととした。

2. 本校の課題とUD授業の取り組み

本校生徒の課題として、全国学力・学習状況調査の結果などから、「活用力」「表現力」の不足、「自己肯定感」の低さが挙げられる。また、本校が独自に実施しているアンケート調査では、

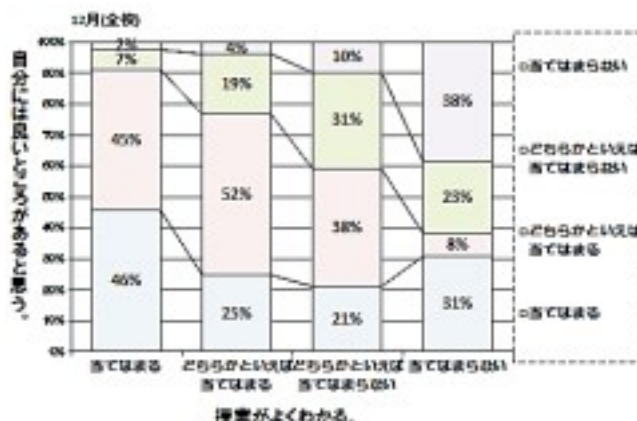
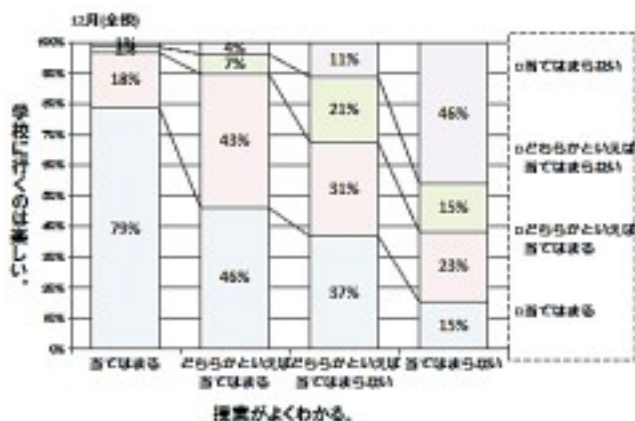
- ・「授業がよくわかる」の否定的回答がクラスに約8人(クラスの4分の1)
- ・「学校に行くのは楽しい」の否定的回答がクラスに約5人 [昨年度2年生(現3年生)/12月調査]

また、アンケート調査のクロス集計で、

- ・「授業がわかる・わからない」と「学校が楽しい・楽しくない」の回答には相関関係がある。
- ・「授業がわかる・わからない」と「自己肯定感」にも相関関係がある。

ということが確認された。(下図)

そこで、学習に対する理解や達成感と子どもたちの意欲や自己肯定感の関連に着目し、「**わかった、できた**」が実感できる授業づくりが生徒の学習意欲や学力向上、自己肯定感の育成や生活改善につながるものと考え、UD授業の研究を推進することとした。「**すべての生徒への『確かな学力』の保障が、生徒の学習・生活両面の育成につながる**」という認識(研究仮説)に立った研究である。



3. 研究内容

(1) 研究のねらい

① 学力の向上（生徒）

- ・基礎的・基本的な知識・技能の習得
- ・考え・練り合い・表現する力の育成（活用する力の育成）
- ・内発的な学習意欲の向上と主体的な学習態度の育成

学力の3要素
(確かな学力)

② 授業力の向上（教師）

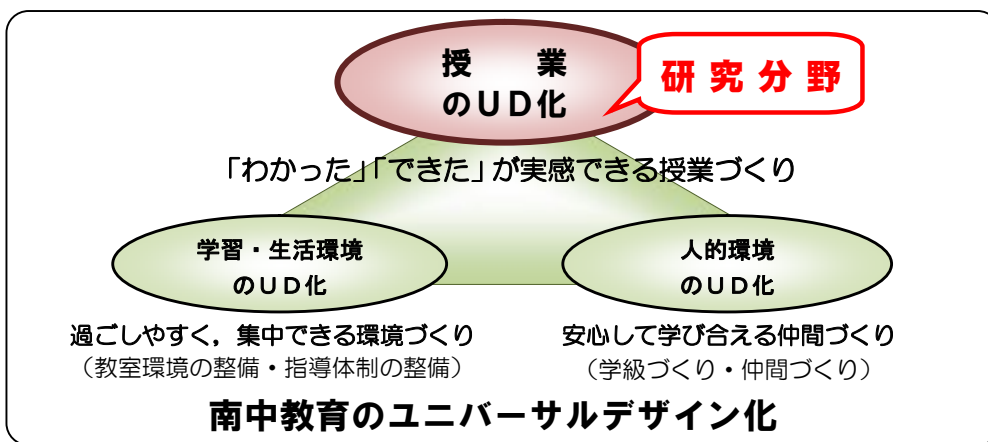
- ・授業をユニバーサルデザイン化する技能の獲得
- ・すべての生徒に「確かな学力」を保障する授業力の向上

(2) 方 策

① 授業のユニバーサルデザイン化

② メンターチームによる授業づくり

(3) 本研究の位置づけ



(4) 本研究を支える授業環境のUD化（「学習・生活環境のUD化」と「人的環境のUD化」）

<学習・生活環境のUD化>

（教室環境の整備・指導体制の整備）

- **教室環境のスタンダード**の構築(教室環境のUD化)
 - ・教室掲示のルールづくり など
- **学習のスタンダード**の構築
 - 授業のスタンダード
 - 家庭学習のスタンダード
 - ・「学問のススメ」の活用
 - ・「家庭学習のススメ」の活用
 - ・家庭学習がんばり週間（チャレンジ南）
 - ・「学力向上」集会・学活 など
- **生活のスタンダード**の構築
 - 学校生活のスタンダード
 - 家庭生活のスタンダード
 - ・3点固定
 - ・GPM大作戦 など

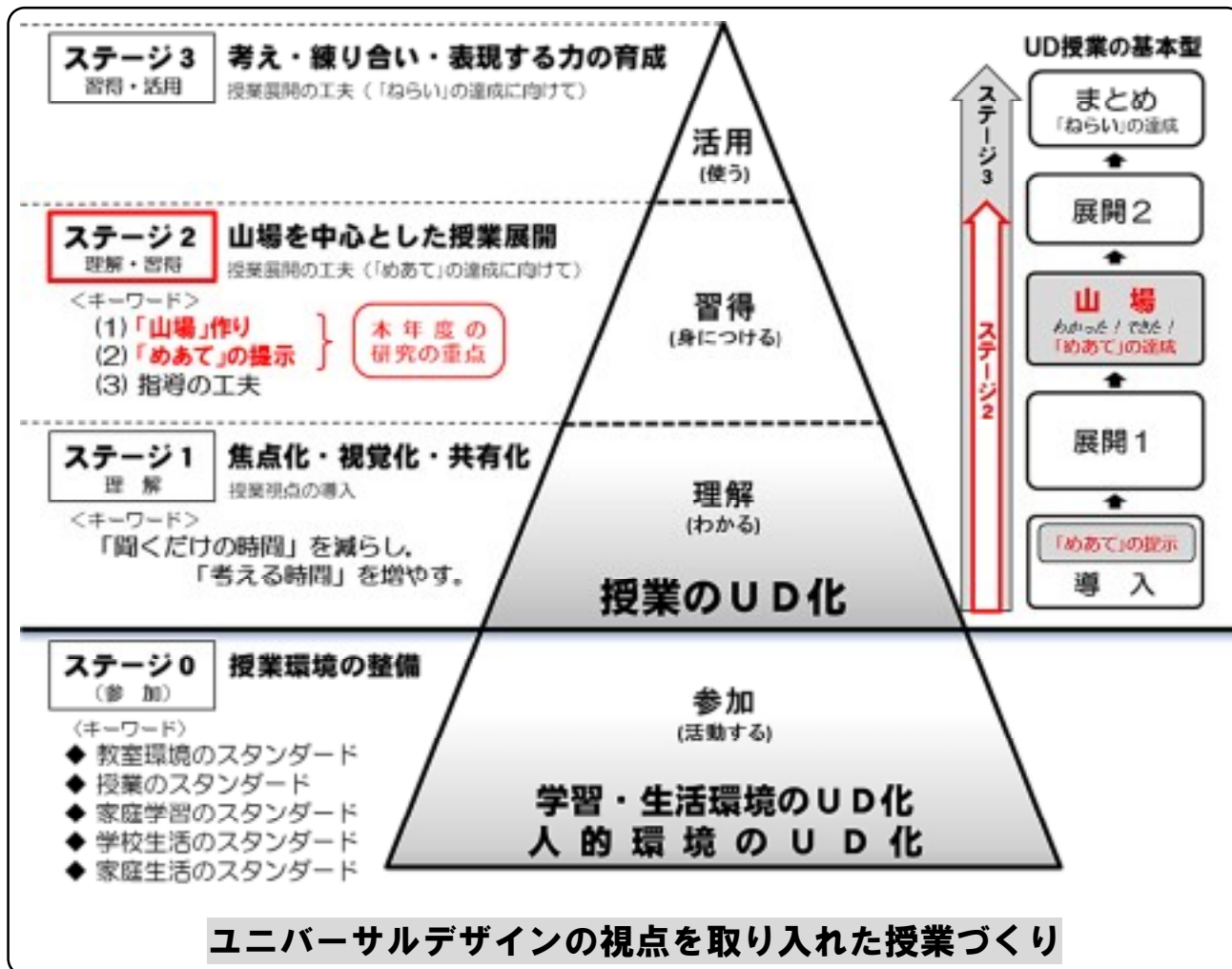
<人的環境のUD化>

（学級づくり・仲間づくり）

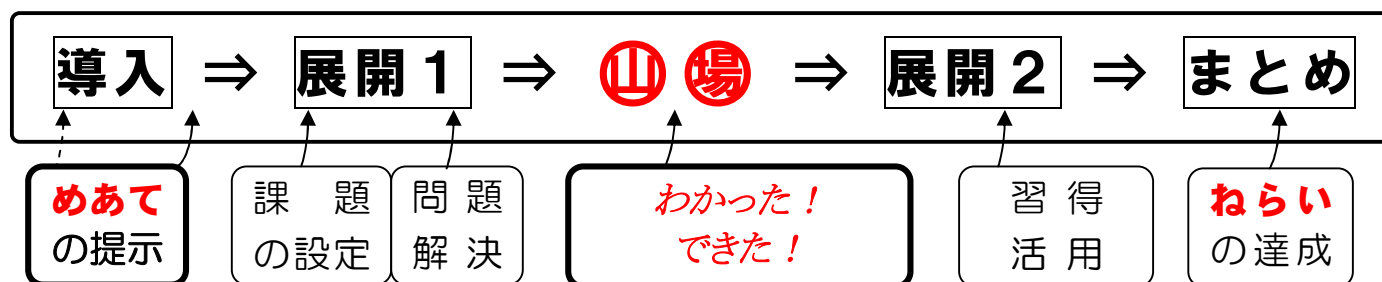
- **総合的な学習の時間**の取り組み
- **特別活動**の取り組み
- **道徳教育**の推進
- **人権教育**の推進
- **からだ・こころ・いのちの教育** など

(5) 研究の構想

〈構想図〉 ※本年度は「ステージ2」



〈UD授業の基本形（1時間の授業の流れ）〉



「山場」

学習活動を通して、「わかった！」「できた！」「あっ！そうか！なるほど！」「そういうことだったのか！」「これだ！」などの言葉（感嘆詞）が生まれ、**生徒の心が動く**場面。

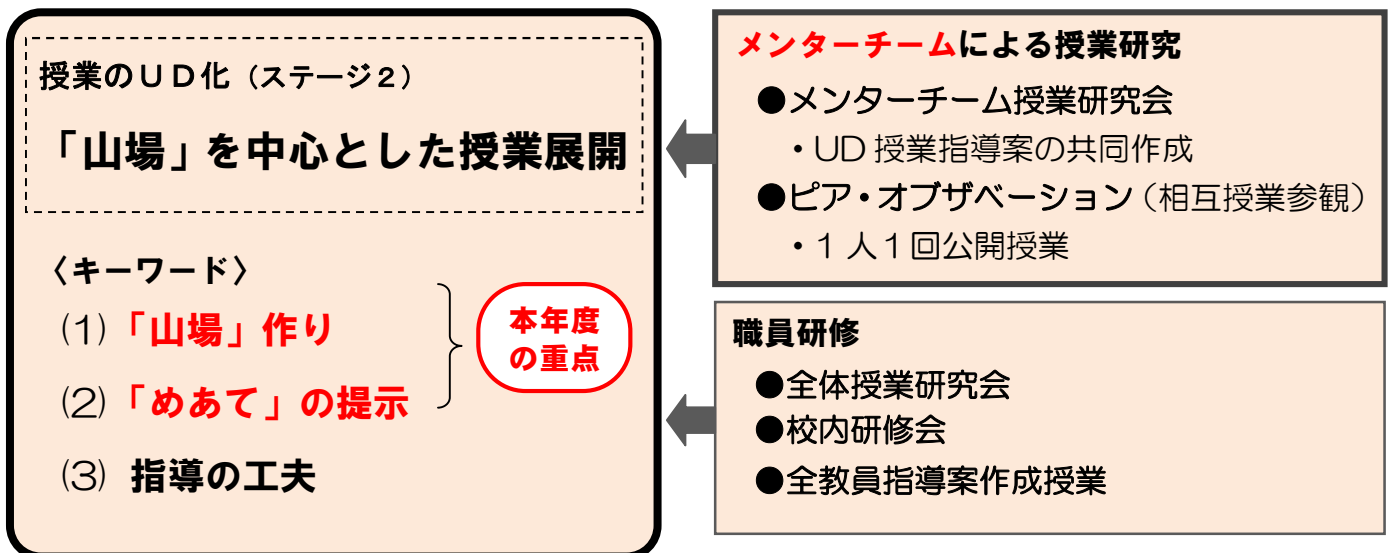
「めあて」と「ねらい」

「めあて」…**生徒の目標**（生徒が達成する活動目標）
「ねらい」…**教師の目標**（1時間で達成しようとする学習目標）

ユニバーサルデザイン授業（UD授業）

- ・「すべての生徒が、楽しく「わかる・できる」ように工夫・配慮された授業」（UD研究会）
- ・「より多くの子どもたちにとって、分かりやすく、学びやすく配慮された授業」（安部利彦氏）

(6) 本年度の研究



「山場を中心とした授業展開」

《実践内容》（本年度の重点）

- (1) 「山場」作り
- (2) 「めあて」の提示

《実践のポイント》

(ア) 「山場」を授業の**中盤**に設定する。

基本的に、山場は**授業の中盤**に置く。

(イ) 「**山場から逆算**」して授業をつくる。

① 「**ねらい**」（学習目標）を明確にする。

↓ 生徒に何を理解させるのか。何ができるようにするのか。

② 「**山場**」をイメージ（想定）する。

↓ 生徒の「**心が動く瞬間**」の言葉（感嘆詞）は何か。

③ 山場に向けての前半の活動（**導入・展開1**）と「**めあて**」（生徒の目標）を考える。

「山場」で、生徒の「**心が動く瞬間**」の言葉が出るためには、

・ どんな活動をするか。（**展開1**）

・ 生徒にどんな「めあて」を提示するか。（生徒の視点で「めあて」を考える。）

・ その「めあて」を やってみたい! と生徒に思わせるどんな導入にするか。

(ウ) 毎時間、「**めあて**」を提示する。

・ 「山場」での達成をめざした**生徒の活動目標**を黒板に示す。

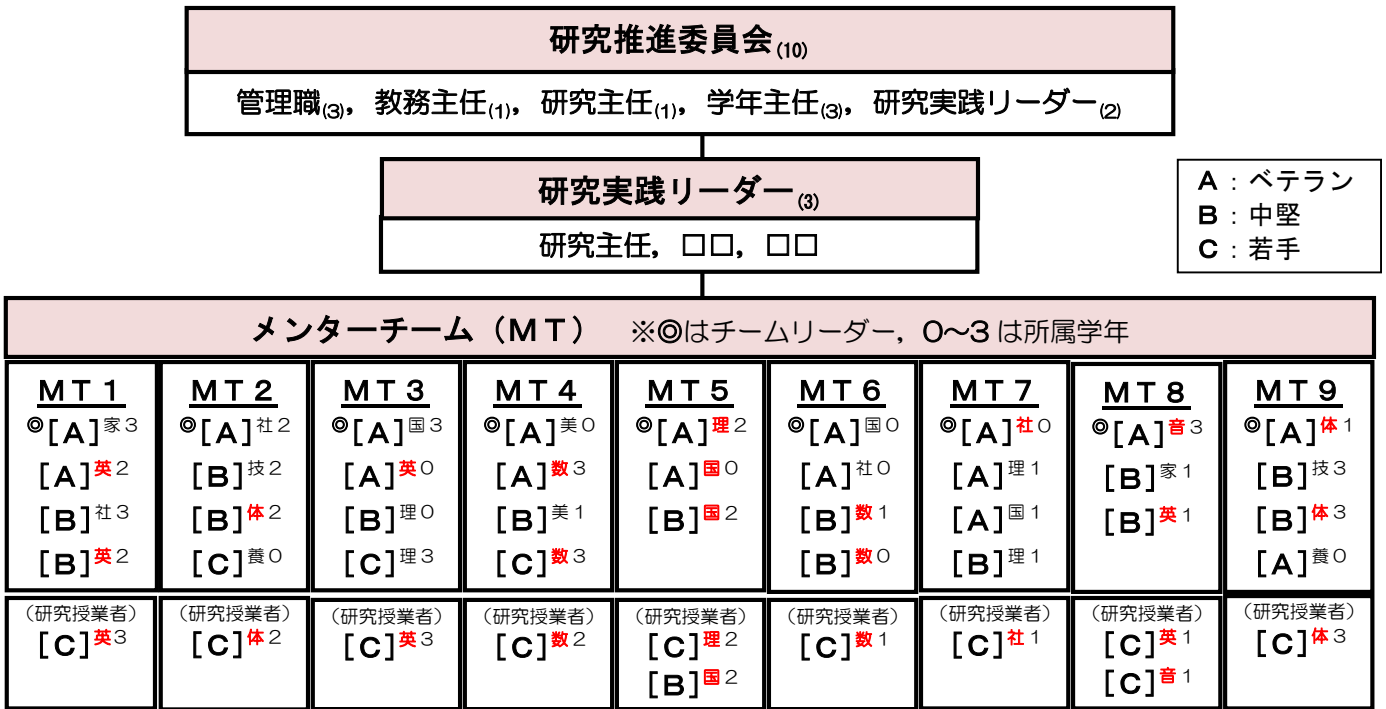
「**山場**」
学習活動を通して、「**わかった!**」「**できた!**」
「**あっ! そうか! なるほど!**」などの言葉（感嘆詞）が生まれ、**生徒の心が動く**場面。

UD授業の基本形（1時間の授業の流れ）

本校のUD授業の1時間の授業展開はこの流れを基本とする。

導入 ⇒ **展開1** ⇒ **山場** ⇒
⇒ **展開2** ⇒ **まとめ**

(7) 研究推進組織



《メンターチームの主な活動内容》

- ① **メンターチーム授業研究会**
 - ・UD授業研究会をチームごとに実施する。
 - ・授業研究者の指導案をチームで検討する。
- ② **ピア・オブザベーション**
 - ・チーム内で相互授業参観を行う。
 - ・チーム内で全員1回は必ず授業を公開する。(1人1回公開授業)
 - ・「授業公開シート」(資料1)を作成し、全職員に配布する。
- ③ **全教員指導案作成授業での相互支援**
 - ・チームのメンバーの指導案に対する助言・点検などを行う。

(8) 職員研修

① 全体授業研究会・校内研修会

5/19(木) **校内研修会**

研究スタート(研究内容の共通理解, MTの活動プラン作成)

6/27(月) **全体授業研究会・研修会(I)**

〈授業者〉***教諭 〈教科〉数学(1年) 〈講師〉松崎利美・^{はす}幡豆中学校前校長

12/21(水) **全体授業研究会・研修会(II)**

〈授業者〉***教諭 〈教科〉英語(3年) 〈講師〉松崎利美・幡豆中学校前校長

1/23(月) **全体授業研究会・研修会(III)**

〈授業者〉(1年団) 〈領域〉道徳 〈講師〉東部教育局指導主事

② 全教員指導案作成授業【12/5(月)】教育委員会訪問に合わせて実施。

(9) 成果の評価方法

- ・「南中基本調査」, 「全国学力・学習状況調査」, 「標準学力テスト」等の分析

メンターチーム

先輩教職員(メンター)が後輩教職員(メンティ)を定期的・継続的な対話や助言によって支援(メンタリング)することを通して, 相互に授業力の育成を図ることを目的に編成したチーム。OJTの一種。

4. スーパーバイザーによる指導助言

松崎利美先生には、6月27日と12月21日の2回、本校に来校していただき、全体授業研究会（研修会）での指導・助言および講演をしていただいた。

この2回の研修を通して、次のような点を学ぶことができた。

1. UD授業を推進するに当たって（視点・考え方、期待される姿・変容など）
 - 授業、生徒理解に特別支援の視点を持つ。
 - 『『困った子』から『困っている子』』に子どもを見る視点を変える。
 - ・（教員から見て）「困った子」として見るのではなく、その子は学校生活に「困っている子」であるという見方で生徒を見る。（子どもの特性ではなく授業を行う側の問題として考える。）
 - 中学校のUD授業は「教科担任制だから無理」なのではなく、「教科担任制だからこそ授業UDが必要」である。
 - ・UD授業は、「教科間の壁」「世代間の壁」「方法・理念の壁」を乗り越え、全教科・全教員で学力向上に向けて取り組める。（校内研究、授業参観、模擬授業など）
 - UD授業の推進を通して、幡豆中学校の生徒に、学力向上、生活の改善・向上などの変容が生じた。また、教員にも変容が生まれた。
 - （生徒の変容）
 - ・学習面：学力検査（全国学テ）の正答率の向上、第1希望校への進学率の増加 など
 - ・生活面：いじめ、不登校、問題行動の減少 など
 - （教員の変容）
 - ・学習指導：授業への意欲の高まり、指導の工夫が見られるようになった。
 - ・生徒への対応（見方）の変化：「○○だからしょうがない」という声がなくなる。
 - ・勤務状況の変化：体調不良での年休の減少。職場の明るい雰囲気（良好な人間関係）。
 - ・部活動指導の変化：指導に生き生きと取り組む顧問の姿（勝利至上主義の考えが消える。）
2. UD授業の実際
 - 授業を焦点化する（シンプルにする）ことが最も大切。
 - UD授業の基本的な流れは「導入→展開1→『山場』→展開2→まとめ」。
 - 「山場」に明確なイメージをもち、工夫する。
 - 「導入」は、授業に全員が参加するための「アンカーの打ち込み」。
 - 「授業の質は落とさない」（UD授業は授業のレベルを落とすことではない。）
 - 模擬授業の動画、幡豆中学校の実践事例の紹介
 - ・動画や事例を通じて、「山場」と「導入」の具体的なイメージづくりができた。

また、松崎先生より本校の研究について次のような評価をいただいた。

- ・小学校に比べて中学校のUD授業研究は、全国的にもまだ進んでいない中、先進校の1つとして南中の研究に注目していきたい。鳥取南中を含めて、全国のUD授業に取り組んでいる中学校の連携を図っていきたい。
- ・研究内容が明確で、職員の理解も進んでいる。
- ・授業研究会での職員の意欲的、積極的な姿が素晴らしく、研究推進の土台となっている。
- ・メンターチームでの研究体制は有用であり、他校の参考にもなる。
- ・今後は、教科の内容に迫るUD授業の研究を追求して欲しい。

5. 成果と課題

(1) 成果

生徒アンケート（南中基本調査）による、各教科に対する生徒の回答結果から、概ね次のような成果（変化）が見られている。教科による違い、学年・発達段階による違い、学習内容や単元による違い等はあるものの、全体として肯定的回答の割合が増しているといえる。

肯定的回答の割合（全教科の平均）

(%)

	7月				12月				変化（差）			
	1年	2年	3年	全	1年	2年	3年	全	1年	2年	3年	全
(1)	83	73	74	77	80	78	76	78	▲ 3	4	1	1
(2)	96	94	92	94	96	95	92	94	▲ 0	1	▲ 0	0
(3)	91	85	81	86	90	89	82	87	▲ 1	3	1	1
(4)	83	84	75	81	85	88	74	82	2	4	▲ 1	2
(5)	74	78	69	74	75	79	71	75	1	1	1	1

〔設問〕

[H28 南中基本調査]

(1)教科の勉強は好きだ。

(2)いつも、「めあて」が示されている。

(3)いつも、「わかった」や「できた」と感じられる場面がある。

(4)考えや意見を出し合ったり発表したりする時間・活動がある。

(5)授業の最後に学習内容をふり返る活動を行っている。

(3)いつも、「わかった」や「できた」と感じられる場面がある。

(%)

	7月				12月				変化			
	1年	2年	3年	全	1年	2年	3年	全	1年	2年	3年	全
国語	90	77	73	80	86	86	76	83	▲ 4	9	3	2
社会	92	84	82	86	86	88	76	83	▲ 6	4	▲ 7	▲ 3
数学	95	95	89	93	93	91	88	91	▲ 2	▲ 4	▲ 1	▲ 2
理科	92	85	82	87	91	94	86	90	▲ 1	8	4	4
英語	93	83	82	86	91	86	83	87	▲ 2	3	1	0
音楽	89	76	71	79	92	79	72	81	3	3	1	2
美術	86	85	82	85	86	91	83	87	▲ 0	6	1	2
保体	93	93	86	90	96	94	91	94	3	1	5	3
技術	89	90	85	88	89	88	85	88	1	▲ 2	▲ 0	▲ 0
家庭	97	93	83	91	96	90	89	92	▲ 1	▲ 3	6	0
全	91	85	81	86	90	89	82	87	▲ 1	3	1	1

[H28 南中基本調査]

(2) 課題

○授業展開上の課題

- ・誰もが参加し、授業のレベルを下げない「山場」づくり
- ・生徒の参加意欲を引き出す『めあて』
- ・すべての生徒を引きつける導入

○教科の内容の充実

- ・授業のレベルを下げない学習課題（展開1）の設定
- ・「山場」から展開2へのつなげ方
- ・教科の本質の実現（教科の内容の習得と活用力の育成）

○具体的な事例の蓄積

- ・実践事例の記録を残し、蓄積していきたい。
- ・教科内で（あるいは教科をこえて）実践事例の共有や検討をする場を持ちたい。

○焦点化の捉え方

「焦点化・視覚化・共有化」をUD化の3視点として1年次から取り組んできたが、「視覚化」と「共有化」は指導方法の工夫（どのように学ばせるのか）であるのに対し、「焦点化」は指導内容の工夫（“その授業で” “その生徒に” 何を学ばせるのかを明確化すること）である。つまり、焦点化とは「ねらいの明確化」を意味し、他の2視点よりも上位に位置づけられる視点といえる。

○単元計画による計画的なUD化

- ・単元ごとの焦点化
- ・年計における焦点化

6. おわりに

スーパーバイザーの松崎利美先生の指導助言や講演から、UD授業先進校としての実践成果を学ぶとともに、UD授業が本校生徒の課題を解決する方法として有用であることを確認することができた。また、本校の研究実践を高く評価していただき、今後も、この研究をさらに進めていくことへの意欲と自信を持つことができたように思う。

今年度は、UD授業の前半部分（導入－展開1－「山場」）の研究に取り組んだ。今年度の実践を通して、「山場をどう設定するか」、「それに向けての展開1をどのように工夫するか」、「子どもの参加意欲を引き出す『めあて』や導入（アンカーの打ち込み）はどうすればよいのか」等、具体的な研究課題が明らかになってきた。この授業の前半部分は、「すべての生徒が参加する」ことをめざすUD授業の根幹部分である。3年次は、より具体的な授業づくりの方法を追求していくことが必要である。

また、授業の最終的な目標（ねらい）は、教科の学習内容の習得と活用力の育成である。「山場」での意欲づけを、学力の定着・向上につなげる授業の後半部分（「山場」－展開2－まとめ）をどうするかが3年次のもう一つの研究課題である。言い換えれば、「UD視点での教科研究」（教科の本質に基づくUD授業の実現）である。

今年度は、UD授業の枠組みについての教員の理解が進んだ。来年度は、“より具体的なUD授業づくりの方法”と、“教科の本質にせまるUD授業のあり方”を追求し、すべての生徒に「確かな学力」を保障する授業力の向上をめざす研究へと発展させていきたい。

(資料1)

授業公開シート (ピア・オブザベーション用)		〈授業者〉 〈日 時〉平成 年 月 日()	〈教科〉	〈学級〉	年 組
単 元 名					
	授業者記入欄	参観者記入欄			
ねらい (学習目標) 教師の目標					
めあて (活動目標) 生徒の目標					
指導の工夫 ・焦点化 ・視覚化 ・共有化 ・導入や展開 での工夫 など					
ふり返り	「めあて」 の達成 生徒は「わかった」「できた」が実感できたか。				
	総括 ・良かった点 ・参考になったこと ・改善点 等				

指導案の様式と書き方のポイント

様式 (略案)

第○学年○組 ○○科学習指導案

平成○○年○○月○○日 (○) ○限
授業者：○○○○○

1 単元名 (題材名) ○○○○○

2 単元 (題材) について

・単元観(題材観), 生徒観, 指導観を記述する。
・単元のねらいをアンダーライン(実線)で示す。

3 本時のねらい (教師目標)

「～を通して, ～を理解し(に気づき), ～することができる。」
〈主活動〉 〈山場〉 〈つきたいカ〉

一致

〈山場〉に向けての活動
(展開1)「めあて」～問題解決

「めあて」達成の姿
(わかった!できた!)

「ねらい」達成の姿
(展開2)～まとめ

4 本時のめあて (生徒目標)

5 UD3視点 (焦点化・視覚化・共有化) の工夫

・焦点化・視覚化・共有化の3視点のうち, 本時の授業に取り入れている工夫について簡潔に記述。

6 準備 省略可

7 本時の学習過程 (第○時/全○時間)

一致

一致

学習活動	○発問 ・ 予想される生徒の反応	・留意点 ○評価【観点】(方法)※手立て	時間	
〈UD授業の基本的な流れ〉			○/○	
導入 「めあて」の提示	(めあて) 「○○○○○○○○○○○○○○○○」	<表記方法> ○・・・評価 【 】・・・(評価の)観点 ()・・・(評価の)方法 ※・・・支援を擁する生徒への手立て (評価・観点・方法・手立てを枠で囲む。) ・印・・・留意点(全体への手だて) 【焦】・・・焦点化 【視】・・・視覚化	○/○	
展開1 (主活動) ※枠で囲む 〈問題解決〉 〈山場〉	(主発問) ※枠で囲む		<評価①> 主活動の評価 (「めあて」の評価)	○/○
展開2 〈習得・活用〉				
まとめ			<評価②> 「ねらい」の評価	

〈重要ポイント〉

- ①「本時のねらい」と学習過程の〈主活動〉〈評価①〉〈評価②〉が一致している。
- ②UD授業の基本形では, 評価が二段階(2回)になる。
 〈評価①〉「めあて」(展開1)の評価
 〈評価②〉「ねらい」(展開2)の評価

★チェックポイント★

①「ねらい」は何か。

【ヒント】この授業で一番に学ばせたいことは何ですか。

まず、1時間の授業で生徒に身につけさせたい「ねらい」を明確にし、**焦点化**することが大切です。

②どのような「めあて」「主活動」「主発問」を設定するか。

【ヒント】まず、**山場**をイメージしましょう。

①の「ねらい」を達成するために、生徒に何を **わかった！できた！**と言わせたい（実感させたい）ですか。その瞬間を「**山場**」とよんでいます。その山場に向けての生徒の活動目標が「**めあて**」です。

そのめあての達成のために、具体的に取り組む学習活動が「**主活動**」、その主活動のための発問が「**主発問**」です。（「めあて」「主活動」「主発問」は一連のもので、UD授業基本形の**展開1**にあたります。）

③どのような「導入」で学習意欲を喚起するか。

「めあて」に対する内発的意欲（やってみたい！）を高めるための仕掛けとして、導入が重要です。

④「展開2」「まとめ」は何をするか。

【ヒント】「ねらい」達成のために具体的にさせたいことは何ですか。

展開1（山場）で得られた達成感を、習得させたり、深めたりする活動につなげ、「ねらい」の達成をめざします。

⑤「聞くだけの時間を減らし、考える時間を増やす」ためにどんな工夫をするか。

【ヒント】**焦点化・視覚化・共有化**

わかった！できた！の実現には、1時間の授業に生徒をどれだけ集中させられるかが勝負です。特に、「聞くだけの時間」での集中力持続には限界があります。授業に**焦点化・視覚化・共有化**の視点を取り入れることで「考える時間を増やす」ことができます。

